

最後の沖縄県知事島田叡（05・05・05）

沖縄戦・もう一つの真実

田 澤

仁（昭和25・理）

まえがき

以下の文は平成十七年五月の長周新聞（下関に本社）に五回に亘って掲載されたものである。その後、私の不勉強で知らなかった文献を目にしたので、それらに基づいていくつかの箇所を訂正、加筆した。追加した文献の主なもの、田村洋三著『沖縄の島守―内務官僚かく戦えり』中央公論新社（二〇〇三）と島田叡氏事業顕彰会編『沖縄の島守 島田叡……親しきものの追憶から』へ兵庫県立兵庫高等学校、一九六四である。とくに田村氏の本からは、島田知事の最後についての叙述を大いに参考にさせていただいた。

沖縄戦の真実

平成十七年四月一二日の朝日新聞の「アジア」版で、俳優の中井貴一が二〇〇一年に米

中合作映画「ヘブン・アンド・アース」の撮影で中国新疆ウイグル自治区の小さな町を訪れた時の体験を語っていた。辺境の地でたった一人の日本人俳優としての撮影の苦勞もさることながら、日中の抱える諸問題について中国の人と忌憚の無い議論を交し、そこから中井は歴史を学ぶことの大切さを痛感し「日本は隠す教育ではなく、ちゃんと（真実を）教えていく教育を考えるべきだとおもいますね」と述べている。「両国の溝を埋めるには政治の力では無理で、『相互誤解』を相互理解にするには、文化の部分から入り込んで行かない」と提言している。

戦時中の大本営発表は、国民に戦況の真実を告げず、敗戦を転進とごまかし、国民が気がついたときは、米軍の猛爆ですべての都市は廃墟と化していた。戦後は占領軍の言論統制で平和条約締結まで、原爆に関する報道は禁止されてきた。さらに、一九六〇年安保条約改訂の時、また沖繩返還にさいして、国民に隠して米國と密約を交している。その核心は、外岡秀俊ら『日米同盟半世紀 安保と密約』（朝日新聞社 二〇〇一）によれば、一つは核兵器搭載のアメリカ艦船、航空機の日本寄港、通過の自由と朝鮮有事の際における米軍の日本基地からの自由発進を認めるものであり、もう一つは、沖繩返還後の沖繩基地内への核兵器再持ちこみを容認するものであった。これは、政府が繰返し国会で答弁した「事前協議の対象となる」と言っていることと全く矛盾するもので、国民を欺くもので

ある。

著者達は一九六〇年の安保改訂の本質を次の様にまとめている。安保条約の改定交渉にあたって、条約適用下にある本土の基地使用が制約されるリスクを抱えながら、米軍部が譲歩したのは、「密約」による権利維持に加え、核の配備、戦闘行動への直接発進を含む沖縄基地の自由・無制限な使用がその前提になっていたからである。その前提を現実たらしめたのが、事前協議の放棄という密約である。

この本を批評した藤原帰一東大教授は、著者達の怒りは「政府が国民に本当のところを言わず、言わないのを当たり前としていることへの怒りである。ワシントンの周到な施策を前にして、手もなくひねられてしまう日本政府のふがいなさへの怒りである。」と述べている（中央公論 二〇〇一年一月特大号）。最近の日本政府は、ひねられる前にアメリカ政府に迎合するありさまで、その最たるものが自衛隊のイラク派遣である。また、最近とみに加速してきた、憲法改正の動きである。これは、米国政府に不評を買っている第九条の改悪を目指したものであることは周知のことである。安保の隠された実体を知れば、憲法の改悪はアメリカと一体化した軍事行動を公然と持つことになるのは、自明のことである。

翻って、長州新聞社の発行している冊子『沖縄戦の真実』は、戦後流布してきた沖縄戦

の虚偽をはぎ取っている。先ず、日本を降服させるためには、沖縄戦は必要なかったと言う事である。なるほど、本土爆撃のため、より近い空軍基地の確保と本土上陸の足がかりを得るのは重要かもしれないが、東京をはじめとする大都市の本格的空襲は、米軍の沖縄上陸（四月一日）の前の三月からはじまった（東京一〇日、名古屋一二日、二五日、大阪一四日、神戸一六日）。日本軍の防衛線が破られ、那覇、首里が陥落した五月三一日までには、日本の都市の大部分はすでに灰燼に帰っていた。戦争の帰趨はついていたのである。

米軍の沖縄攻略の真の目的は、占領後、日本を共産圏に対するアメリカの島嶼防衛線の強力な前哨として役立たすことにあった。マッカーサーは米国の戦略的国境はアジア大陸東海岸にあり、沖縄は米国の最前線の死活的ポイントで、沖縄さえ確保すれば、本土の基地は必要ないと認識していた（『日米同盟半世紀』24～25ページ）。この沖縄の戦略的重要性こそ、多大の犠牲を伴った沖縄戦の真の目的だったのである。沖縄長期占領のため、米軍が沖縄を解放した善い軍隊で、日本軍は住民を虐げた悪い軍隊であった、という宣伝を強力に行った。

しかし、『沖縄戦の真実』はこの虚偽を覆した。沖縄戦を体験した県民の生の声は、一部の日本軍の心ない行動を非難しているが、県民を守るため、死を賭して戦った兵士達に深い愛惜の念を伝えると共に、戦闘員、非戦闘員の区別なく徹底的に虐殺した米軍に対す

る恨みの念は深いことを明かにしている。

『沖繩戦の真実』には、県民の生命を守る責務を負った県の行政責任者のことに触れていない。筆者はある機縁で、最後の沖繩県知事であった島田叡（アキラ）の事跡を知り、熾烈な沖繩戦を県民と共に戦い、死んだその崇高な使命感に心を打たれた。その機縁は、私の母校である旧制第三高等学校（新制の京大教養部に吸収）の同窓会誌である。昭和五六年の三高同窓会会報五四号と、昭和五八年の会報五八号、五九号に、大正十一年卒の島田叡の二年後輩の名倉周雄が、『友よききませ「紅萌ゆる……」故 島田知事にささぐ』という文を寄稿した。内容は、読売新聞に昭和五五年十月九日から掲載された読売新聞大阪本社社会部の田村洋三の筆になる『戦争』と題する連載物にある記事で、その抜粋を名倉が紹介したのである。また、三高野球部で一年後輩の作家、中野好夫は、すでに昭和三年、文芸春秋新社より『最後の沖繩県知事』（ちくま日本文学全集・筑摩書房に再録）を発表している。以下、主にこの二つの文献に従って島田叡知事のことを記す。

島田知事の任命

時は日本の敗色の濃厚になった昭和二〇年一月一日の朝であった。「大阪府の内政部長の島田家では、いつものように家族四人―夫人美喜子さん、長女黎子さん、次女幸子さ

ん——が朝餉の卓に向かつていた。と突然、電話のベルが鳴って、出てみると、隣家の知事官邸から叡さんに話があるから、一寸きてほしいという。叡さんは立って出て行った。やや長い時間があつて、叡さんは戻つてくると、妙にニヤニヤ笑っている。不審におもつて、美喜子さんがききただと、本省からといって、沖縄県知事の内命を聞かされたと答えた。美喜子さんは、一瞬全身の血が音を立てて退くを感じた。それでお受けになったのかとただと、叡さんは静かにもちろん受けて来たと答えた。そして大事な点だが、翌十二日にはすでに正式に発令が出ているのだ。いわばこれが島田家運命の一日であつた。嘆く美喜子さんに島田は、『これが若い者ならば、赤紙一枚で、否応なしに行かなければならないのではないか。それを俺が固辞できる自由をいいことに断つたとなれば、俺はもう卑怯者として外も歩けなくなる』、とも言つたという。」以上は中野の文からである。一方名倉が戦後元大阪府知事池田清から聞いた話は次の通りである。内務省から、島田を沖縄県知事候補に内定したから意向を聞いて欲しいと言われた知事は、島田を呼んでそのことを告げた。そして、もう少しかないときは、次の候補にあたらなければならぬからとも言つた。知事が「キミ、どうかね」と尋ねると、島田は「私が行かなかつたら、誰かが行かなければならぬでしょう。私が行きます」と、はっきり即答した。これには知事が驚いて「キミ、妻子があり、親戚もあることだから、三日程よく考え相談した上で返事

しても良いんだぞ」と言ったが、島田は、「いや、これは相談することではありません。私が決めることです」と言つて、返事を変えなかった。島田は沖縄知事承諾の事実を、当日、夫人・美喜子の実兄で三高で一年先輩の勝島喜一郎にも告げた。勝島はびっくりして、「どうしてだ」と聞くと、「牛島さん（沖縄派遣第三二軍司令官・牛島満中将）から赴任を望まれた。男として、名指しされて断ることはできないじゃないか」と言った。勝島は、島田が上海領事館の警察部長時代から、牛島とは肝胆相照らす仲と聞いていたので、「ああ、こいつは死ぬ覚悟をしたな」と思い、引き止める説得はしなかった。

知事任命の背景

実は、島田の知事行きの背景には次の事情があつた。そのことについて、一九九三年の三高同窓会報七七号に、昭和二五年卒の山本英二が明らかにしている。

山本は山里永吉の『沖縄史の発掘』（潮新書 一九七二）を引用しながら、沖縄の歴史をたどっている。武器を持たない平和国家として三百年続いた独立王国沖縄が、薩摩の武力によつて攻略され、名目上の独立は許されたが、薩摩の圧制と搾取は、明治十二年の日本政府による日本併合まで続いた。日本政府は中国からの経済援助を禁止し、過酷な国税を課し、有名な「蘇鉄地獄」に象徴される経済破綻をもたらした。同書によれば「明治三

○年頃までの沖縄人は、決して自分たちが日本人であるとは思っていなかった。

沖縄の一般庶民が自分たちは日本人であるという自覚をもつようになったのは、日清戦争以後の教育の力である。政府が沖縄人を信用していなかったことは、最後の琉球王を、明治十二年から亡くなられた明治三四年まで、東京に軟禁した事からでもわかる。島田知事の頃にも、年寄りの沖縄人は、日本人を信用していなかったことは考えられる。」

新里金福・大城立裕は著書『近代沖縄の人々』（太平出版社 一九七二）で、この間の事情を次の様に述べている。「沖縄県政六六年の特質を『ある皇民化の過程』として要約することもできよう。その間、官選県知事二七代のうちには、さまざまな人がいて、それぞれの流儀でこの『皇民化』を推進した。皇民化教育と言う、この奇妙な押しつけがましい哲学は、知事の個性差によつてさまざまな色合いを見せたが、皇民化の最後の総決算が沖縄戦における県民の悲劇であるとすれば、県知事のそれへの向かい方として、われわれは二人の対照的な典型をもった。二六代泉守紀と二七代島田叡とである。一九四四年一月一日に就任した泉知事は、サイパンが陥落して以来、ふくらんでくる不安感のただなかに一二月末ついに出張名目で離県し、そのまま香川県知事に転じた。……沖縄戦は時間の問題だとされていた。後任知事に対する県民の希求は、（１）県庁職員の陣頭指揮者としての智と勇を備えた人物であり、（２）沖縄軍司令官と官等級で同級の知事であること、と

いうことであつた。

新知事の活躍

かくして、島田は発令から二〇日足らずの一月三十一日に福岡の雁ノ巣飛行場から陸軍機に乗って沖縄へ向かった。トランクの中には拳銃二丁と『大西郷遺訓』と『葉隠』が入っていた。

福岡まで同行したのは、村井順教学課長と曾我新一秘書だった。島田に仕えて僅か半年だったが、二人とも、島田と共に転勤を志願した。しかし「君たちが行くことはない」と聞き入れられなかった。決死の沖縄行きを上司と共にお願い出るほど、島田は部下から心底敬愛されていたのであろう。

着任した島田新知事を県職員は県庁玄関前の広場で迎えた。数日前秘書を命じられた小渡信一、徳田安全は当時の思い出を、目を細めて「勅任の地方長官と言うより、牧師さんのような感じだね。挨拶は簡潔なのに、この長官は自分たちを捨てて行きはしない、この人となら最後までついて行ける、と思わせるものがありました」と語る。

記録によると、島田知事の着任の訓示は「沖縄県はいまや世界の注視の中にある。とくに一億の同胞は手を合わせて、県民の奮闘を期待している。われわれは、たとえ草を食み、

石にかじりついて、同胞の期待に応えなければならぬ……」というものであった。

挨拶を終えた知事は、庁舎を一巡したが、ほとんどの部屋ががら空きになっているのに、キツとなった。空襲を恐れた県の中樞部が、前知事が去った後独断で安全な中部普天間にある中頭地方事務所に避難していたのだった。島田知事は語気強く、内政部長に全職員が県庁舎に戻るよう命じた。知事は翌朝、官舎は空襲で壊れていたので、仮宿舎から早速出勤した。全職員が知事に従ったのはいうまでもない。

島田知事の取った処置は、職員、県民の知事への信頼を一举に回復した。実は前年の昭和一九年七月六日サイパン島の守備隊が玉砕してから、沖縄は第一線戦場に指定され、政府は老幼婦女子一〇万人を本土と台湾へ移す命令を出していた。何とか平穏な状態の下で安全地帯へ脱出しようと目論んでいた知事と内政部長は、沖縄の情勢の緊迫化を告げる県民の疎開に猛反対し、疎開は一向にはかどらなかった。彼らにとって県民の安全は二の次で、身の安全を優先したのだった。

島田知事赴任後、知事が県民を守るため奔走しているのに、副知事に相当する本土出身の内政部長は重大任務と称して東京に出張し、結局病気を名目に帰任しなかった。衛生課長も県民疎開船の船倉にかくれ、九州に逃れた。流石に内務省は彼を懲戒免職にした。其の他にも、公用出張中の高等官、県議、校長などが行方不明となって、戦線離脱するもの

が相次いだ。

島田知事は参謀長の長勇中将との協議で、敵機動部隊の来襲が切迫していること、沖縄での戦闘は長期にわたる（六ヶ月以上）との軍の予想を聞かされた。軍はその対策として、（１）県民の食料六ヶ月の確保、（２）本土への疎開と同時に、北部山岳地帯への緊急退避の即時実行を要請した。

（１）に関しては、当時食糧備蓄は三ヶ月だったので、自給体制の確立と同時に、知事は二月二一日もしくは二二日、危険を犯して自ら台湾に飛び、三千石（四百五〇トン）を確保してきた。この台湾米は三月中旬那覇港に到着し、県民の飢えを癒した。（２）については、疎開は輸送の許すかぎり続行し、北部山岳地帯には土木課員を総動員して、収容所をつくる。以上の案件をテキパキと決めて実行に移していった。また五〇万県民に趣旨を徹底させるため、二月一〇日には緊急市町村会議を焼け残った県立二中校舎に召集、自ら議長となつて議事を進めた。秘書の小渡は「行政手腕は鮮やかと言う他なかった」と感嘆している。疎開を渋る県民を説得するため、知事自身農村を行脚し、村民がその気さくな態度に打たれ、泡盛をご馳走し、知事と農民とが車座になつて酒盛りをしたこともあったという。

当時の人口課長浦崎純は島田知事の心中を、追悼文「島守の神―島田知事を偲ぶ」（島

田叡氏事跡顕彰会 兵庫県立兵庫高等学校、一九六四）の中で次のように書いている。「焼けつくような太陽のもとで、彼らは陣地構築に、食料増産に必死の働きを続けてきた。……だが、これに酬ゆるものは何であろう。それは敵の上陸戦であり、集団玉砕ではないか。島田知事はもはやこれ以上県民を駆使させることは忍びなかった。いずれは死んで行くであろう彼らに少しでも楽しい思いをさせてやりたかった。島田知事の親心はこうであった」知事は統制の厳しかった酒、タバコの特配をさせたり、禁じられていた娯楽の村芝居を復活させた。荒井退造警察部長を呼んで、「もう風紀取締りはしなくてよい」と指示したという。花も実もある善政であった。県民が慈父の如く慕ったのは当然であった。

いよいよ三月二三日の大空襲から沖縄戦局の幕が開く。四月一日に米軍の沖縄本島上陸、五日には島は南北に分断される。米軍の攻撃は南部に向けられ、日本軍の抵抗は特攻と玉砕戦術で、米軍の圧倒的物量に抗し、二ヶ月間、那覇、首里を敵の手に渡さなかった。しかし両市陥落後は、南に向かつての敗退行で、遂に六月二三日の牛島軍司令官、長参謀長の自決をもって、一応沖縄戦の幕は閉じた。

この間島田知事は県職員と共に、壕の中で、執務した。島田知事の動きを追って見よう。

（182頁の図参照）

米軍上陸後

三月二五日知事は県庁を那覇市から首里市識名台地の五壕へ分散移動させた。那覇市の城岳に掘られた県庁職員用の頑丈な防空壕は海軍に譲ったからである。首里には軍司令部があり、軍との連絡が緊密に取れ、住民の避難に素早く対応できるという思惑もあった。知事は最初は与儀病院の敷地内の簡単な壕に入ったが、米軍上陸の四月四日には、繁多川にある、猛爆に堪えられる、那覇警察署の新壕に移った。

このとき知事の身の回りを世話した照屋（現姓・矢賀）千津子の話によると、知事は九時頃から首里城地下の軍司令部へ行き、夕方五時ごろ帰ってきた。この間、二キロぐらいの道は砲撃の一番激しい所だったが、ほとんど毎日出かけたという。艦砲射撃、空襲、地上砲火の下で、沖縄県政は、まさに命がけだった。壕の強化、拡張作業には率先して参加した。軍や村民からの差し入れの食物も自分たちはちよっぴり戴いて、あとは職員や怪我人に与えるようにした。

知事は軍とは極めて協調的だったが、県民の安全確保に関しては、時には、軍の意向に逆らった。例えば、県外への学童疎開は軍の反対をおして強行し、軍が首里放棄を決定し、住民の南下を命じたときは、それは戦線を拡大し、県民の犠牲をいよいよ大きくするとし

て反対した。真意は停戦の提唱にあつたようである。

四月一九日、米軍は第一次攻撃を加えた。日本軍は敵に甚大な損害を与えたが、結局、外郭防衛陣地は首里北方六キロから四・五キロまで押し下げられた。二四日、軍は首里・那覇地区の非戦闘員の南下を命じた。二五日には米軍の第二次攻撃が始まった。知事らは真和志村繁多川の那覇署の壕から南一・五キロの同村真地にある県警察部の壕に移った。自然洞窟を利用した壕が完成したからである。

二七日には壕の中で、米軍に占領されていない南部地区すべての市町村長と警察署長の最後の緊急合同会議を開いた。軍の憲兵将校も出席していたが、知事が司会して決めたことは、すべて県民の命と安全を何とか守りたいの一念から発したものであった。例えば、餓死者を出すことは、行政担当者の最大の恥であると強調し、芋の植えつけ、麦、大豆の収穫を夜間に進めるよう督促した。避難民は「生死を共にしている今こそ、同胞愛を発揮して世話してやって貰いたい」と、何回も頭を下げて頼んだ。

避難民の安全については、この会議直後、警察部による「警察警備隊」、職員による「県後方指導挺身隊」を編成、課長たちを隊長とする分遣隊を南部各町村に派遣し、避難民の誘導にあたらせた。分遣隊員は空襲の止む夜間、砲火を避けながら村内の壕を駆けまわり、壕の強化を促したり、移動をすすめたり、食料の夜間増産を督促したり、避難民の

受け入れを頼んだりした。知事の意図はかなり末端にまで行きとどき、民の被害を最小限に食い止める努力が続けられた。

五月五日の日本軍の第二回総攻撃は失敗し、二二日には首里の軍司令部は南への撤退を決定した。知事らも二五日、南十キロの東風平（こちんだ）村志多伯の野重一連隊の壕へ、さらに二七日にはさらに南西三キロの兼城村座波の「秋風台の壕」へと移った。五月三一日、首里は遂に陥落し、米軍は南部へ怒濤の進撃を開始した。知事らは六月五日、秋風台から南へ五キロ、本島南端に近い真壁村伊敷部落へ落ち延び、自然洞窟「轟の壕」に入った。そこで、県職員からなる「後方指導挺身隊」を事実上解散させ、三〇五人の小人数の班に分け、犠牲を分散させ、知念、玉城（たまぐすく）方面へ下って、住民を保護せよとの命令を与え、自然解散の形を取った

六月七日、那覇市のすぐ南、小禄を守っていた海軍沖縄方面根拠地隊（沖根隊）の司令官大田少将は、島田知事・荒木警察部長の意を体し二人に代わって、沖縄県民の献身的な戦いぶりと、後世にわたる国の特別の配慮を訴えた不滅の電文「沖縄県民斯克戦へり」六百八十六文字を海軍次官宛、打電した。島田知事とはほぼ同時期、僅か一日早く沖縄に赴任した大田司令官は、知事とは肝胆会い照らす仲だった。知事はおそらくこの電文は見えない。

六月九日には、「警察警備隊」にも解散を指令した。また側近の職員達に行動の自由を与えた。六月一六日この壕を出て最後の地となる南端の摩文仁（まぶに）台に向かうときには、同行を志願した県職員のうち、仲宗根官房主事には同行を許したが、嘉敷、小渡の両秘書官と当真警護官には「君たちは若い。生きて沖繩再建のために働きなさい」と言つて、同行を許さなかった。摩文仁の軍司令部壕までは、案内役の毎日新聞那覇支局長野村勇三と上の四人の職員が従つた。司令部壕に行くと、牛島司令官は、知事らを軍医壕へ行かせた。ここまで知事に付いてきた若い三名は、立ち去りがたい思いに駆られていた。小渡秘書官の回想によれば、再度同行を願い出ると、知事は険しい表情で「帰りなさい。これは私の命令だ」と厳しい口調で言つた。そしてすぐに柔和な顔に戻り、百円札の束を渡し「僕はもう使うことがないから、取つておいてくれ。皆、今後は自重自愛するように」と。さらに、役人や警察官の標識はすべてむしりとり、焼き捨てて、一般地方人として投降せよと、細かい注意を与えている。米軍は投降した者以外は、民間人であつてもことごとく射殺していたからである。三人とも滂沱の涙だつた。

荒木警察部長は、ひどい下痢と発熱のため、二日遅れの一八日に仲村警部補や警防課員に支えられて、軍医壕に合流した。結局軍医壕に同行したのは、荒井警察部長、仲宗根官房主事、仲村警部補の三名だつた。

軍医部壕に同居して助かった薬剤中尉大塚康之の話を引用する。最初知事は、「軍司令部壕へ行かれ、牛島司令官と長参謀長に挨拶された。その時、司令官に『最後の行動を共にさせていただきたいから、この壕に同居させて欲しい』と頼まれた。ところが、牛島司令官は『自決するのは、われわれだけでよろしい。知事は行政官で、戦闘員ではないのだから、ここで死ぬ必要はありません』と言われた。軍司令部壕に居てもらうと、知事は自決しかねないと思われたらしく、軍医部の壕に移るよう言われたのです」

知事の最後

六月一九日、米軍は摩文仁の丘に迫撃砲による猛攻を開始した。司令部は命令系統を解除した。島田知事も、仲宗根官房主事と仲村警部補に自由行動を命じた。二人は壕を出て行ったが、その後の消息はわからない。当時毎日新聞那覇支局長の野村勇三の話によると、六月一九日夜脱出の前、知事にお別れの挨拶にいった時、野村は屈み込んで小声で、投降を勧めた。すると知事は、キツト顔を上げ、「君、一県の大官として、僕が生きて帰れると思うかね、沖縄の人がどれだけ死んでいるか、君も知っているだろ」と言った。島田知事と一〇日余、壕生活を共にした大塚中尉の回想によれば「負け戦の軍司令官は、その責めと、幾多将兵の戦死の責任をとって自決する。とすれば、幾多県民を死なせた地方

長官も又、その責めを負わねばならない——これが島田さんのお考えでした」「本島が陥落したら自分は生きておれぬから自決する、と何度も言われた。私としては、『まだ死なれるのは早い』と押しとどめるほかありませんでした」

引き続き大塚中尉の話から。六月二日早暁から米軍の総攻撃が始まった。朝六時ごろ一旦砲撃が止んだ。米軍はスピーカー放送で、非戦闘員の退避を呼びかけ、その道路も指定した。司令部の命令により女性三〇名ほど、知事の説得により県庁の職員二名が壕を後にした。総攻撃は午前七時に始まり、摩文仁の丘の最上部にあった経理部の壕は全滅し、軍医部壕の入り口も吹き飛ばされ、軍医部長以下三六名と知事、警察部長は鍾乳洞の穴が空いていた奥まった空間に退避した。夜になって攻撃が止んだ。

その夜、大本営から牛島軍司令官宛て「貴軍の忠誠により、本土決戦の準備は完了した——」に始まる玉砕日本守備隊に送られる決まり文句の慣用電報が届いた。電文を見て長参謀長は「キツと唇を噛んだ」と八原高級参謀は書いている。沖縄守備隊は最後の最後まで、「捨石」扱いだった。

二三日早暁牛島司令官、長参謀長自決、組織的戦闘は終わった。戦没者は、米軍一万四〇〇五人、日本側は二万九六八六八人、内沖縄以外の将兵六万五九〇八人、沖縄出身軍人・軍属二万八二二八人、県民犠牲者は実に一五万三七七八人であった。

残った将兵は至難の脱出を試みた。大塚によれば島田知事は二五日もしくは二六日、体の弱っていた荒井警察部長と共に壕を出たという。大塚は、荒井部長は長距離を歩ける体でなかったから、死に場所を求めて出られたな、と思った。また元沖縄県人口課長浦崎純は「島守の神―島田知事を偲ぶ」(一九六四)の中で、生還した毎日新聞記者の言「知事は六月の下旬、一人静かに摩文仁の海に入水したと言われる」を引いている。永年、沖縄戦、特に牧民官島田知事と護民官荒井警察部長の事跡を追って来た元読売新聞大阪本社社会部長田村洋三は著書『沖縄の島守』(二〇〇三)の最終章「二人の島守」の中で、「島守の最期」を次のように述べている。

「一九七一年八月二七日付け西日本新聞朝刊に「私は島田知事の最期を目撃した」「東京都の山本さんが名乗り出る」の見出しが付いた記事が掲載された。浦崎は一九八〇年読売新聞で島田知事を最初に取り上げたとき、山本を訪ね詳しく話を聞いた。当時、山本初雄兵長は独立機関銃大隊の出村中隊山川小隊の分隊長で、沖縄戦終わり近くの総攻撃後、生き残りたった六人で、北部への脱出を図った。もう七月に入っていたようだが、彼らは、摩文仁から北東一〇キロ当たりの具志頭、玉城辺りの自然洞窟に潜んでいた。

山本の話をつなぐと次のようになる。摩文仁の丘から北東三キロぐらいの海のすぐ近くに自然壕があり、そこには男二人、女一人の三人が入っていた。その上の方に水際から五

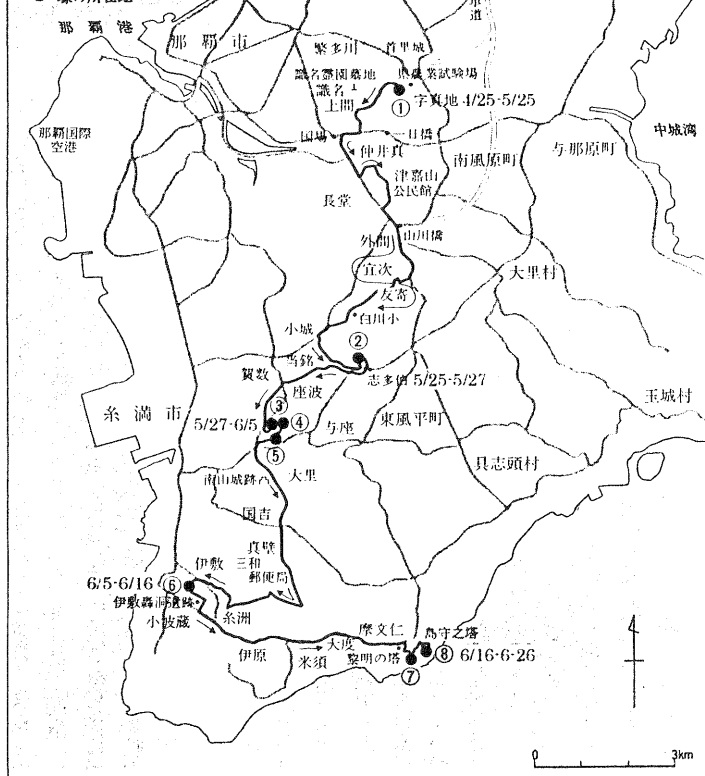
○メートルぐらい上がった断崖の中腹に横穴壕があった。夕方で暗かったが、山本は壕に入ったところ、男が一人横たわっていた。死んでいると思ったのに、その人は声をかけてきた。「兵隊さん、知事です」と言われたように山本は記憶している。名刺まで差し出され、受け取ったが、よく見なかった。知事さんは左大腿部を負傷しているらしく、左肩を下にし、横になったおられた。『負傷されたのか』と聞くと、『足をやられました』と言われた。もう体を自由に動かせる状態じゃなかったですねえ。何か黒っぽい国民服のようなものを着て、黒縁のまんまるい眼鏡を掛けていたのを覚えています。壕の中には、ほかにだれも居らず、図囊のそばにふたを取った飯盒がありました。すると、知事さんは『兵隊さん、飯盒の中に黒砂糖があるから、持っていらっしやい』と言われた。なるほど、黒砂糖の四角い板が三枚入っていましたので、『そいじゃ、申し訳ないが二枚もらっていきます。元気でいてください』と言って、壕を出しました。

翌日か翌々日、小麦粉の団子に黒砂糖をまぶして、それをお礼に知事さんのところに持って行った。そして、例の横穴に入ろうとすると、下の壕に居た三人が『知事さんは亡くなりましたよ』とはっきり言いました。その人たちは学校の教師だと言っておりましたから、知事の顔は知っていたわけで、私は、その時、ああ、やっぱり知事だったんだなあ、と改めて思ったのを記憶しています。壕に入ると、知事さんは先に見たのと同じ姿勢で横

挿図15 島田知事一行がたどった南部落ちルート全国 (知念堅亀さんと著者の合作)

- ①真地の県庁・警察部隊
- ②志多伯の野重1連隊壕
- ③秋風台の壕
- ④福地森の壕
- ⑤大城森の壕
- ⑥森の壕
- ⑦摩文仁の軍司令部壕
- ⑧摩文仁の軍区部隊

→ 進行ルート
● 壕の所在地



原図 田村洋三著『沖縄の島守』2003 中央公論新社 挿図15
地名の横の数字は島田知事の滞在した月日を示す。

たわっておられたが、あごの近くに小さな拳銃が落ちていました。……拳銃で自決されたな、と思いました。合掌して、知事さんの壕を出ました。

山本は翌年の一九四六年夏、米軍に投降、その時、唯一の物証であった名刺も、財布ごと没収された。山本はテレビ放送のあった翌年、一九七二年、知事の居った壕を探しに行ったが、海岸の様子も変わっていて、確認できなかった。

『沖縄の島守』の著者田村洋三は、「島田は苦楽を共にした荒井（警察部長）が力尽きた後、従容と後を追った、と思えてならない」と結んでいる。島田の在任期間は五ヶ月、新井は満二年、行年は島田四三歳、荒井四四歳だった。

島守の塔

今、摩文仁の丘の東外れの麓に、「島守の塔」がある。約一間立方の土台の上に立てられた石碑には『戦没 沖縄県知事島田勲・沖縄県職員 慰霊塔』と記され、知事はじめ戦没県職員四五八柱が祀られている。昭和二六年（一九五一）、旧県庁の生存職員三百数十人を中心とする全県民の浄財によって建立された。塔から十数歩石段を上がったところに、『沖縄県知事島田勲・沖縄県警察部長荒井退造終焉の地』の記念碑が立っている。塔からやや離れて、左には「鎮魂」と刻まれた碑がある。昭和四六年、旧制三高野球部有志が、

部員の寄金で建立した。碑には島田の一年後輩の投手・山根斉（大正一二年理乙）が捧げた「島守の塔にしづもるそのみ魂 紅萌ゆるうたをききませ」の一句が刻まれている。塔の右には、同期（大正一一年文乙）の俳人山口誓子の『島の果世の果繁るこの丘が』の句碑が立つ。島田の出身中学、旧制神戸二中、現兵庫県立兵庫高校でも、昭和三九年、沖縄に向けて「合掌の碑」を建立し、島田杯を制定した。杯の一つは沖縄県高野連に贈られ、秋季大会の優勝杯として、島田の名を伝えている。

石野径一郎の『ひめゆりの塔』（講談社文庫）の解説の中に岡部伊都子は「沖縄に終戦は来ない」と書いている。本土の人には重い問いかけである。日本における米軍基地の七五パーセントが、面積にして全国の僅か〇・六パーセントしかない沖縄県に集中したままである。このように沖縄は、戦争が終わっても一貫して、日米安保体制の根幹を荷わされてきた。しかも基地の占める面積は県土全体の一一パーセントにもなり、沖縄本島では約二割にも達する。基地の九割近くを国有地が占める本土と違って、沖縄の基地は、市町村有地が三〇パーセント、私有地が三三パーセントを占めている。住民に対する基地の圧迫は想像を絶する。最後の沖縄県知事島田叡は、沖縄戦を県民と共に戦いながら、県民の安全と平和を希求した。戦いに倒れた二二万人の兵士、県民とともに、島田は、再び沖縄を戦火に曝す危険性のある沖縄基地化を断乎拒絶するであろう。

結び

敗戦の翌年の一九四六年六月、復員した大塚・元薬剤中尉は大阪府庁に出頭し、島田知事と荒井警察部長の最期近くまでの状況を報告した。また、大阪府枚岡市（現在の東大阪市）石切に住んでいた島田家を訪問、同じ内容を伝えた。大塚は「美喜子夫人は、夫のこにより、県民の被害をひどく気にされていて、その気丈さに打たれました」と語っている。

一九五一年六月二五日の慰霊塔『島守の塔』の除幕式には美喜子夫人は招かれて参列した。夫人は次のように挨拶された。「この地にこんな立派な塔を建てて下さったことは遺族の一人として無上の喜びであります。東京から招んでいただき、はじめて最期の地にぬかづきました。この感激は生涯忘れることは出来ません。各方面からのご援助に対し厚く感謝を申し上げます。今日お見えにならない荒井警察部長さんの奥さまと二人分の御礼を申し上げます」

（東大名誉教授）